

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3





筆

M

文庫藏  
溪花莊

萬物山の事無至るはの爲  
經度程多遠乎樹那緒の通  
せれも難事と多々し爲あれ  
然山在よハシでとづれ草の  
のりと日暮難事と前く  
れいのう百の事ねむ  
う一走とふらう

右 番古店の筆述

墨香森  
松守  
墨香  
墨香

小  
倉  
百  
句

鉢

構

生  
ま  
れ  
や  
鉢

天  
智  
天  
皇

こ  
う  
す  
で

衣  
れ  
も  
と

持  
統  
天  
皇

だ  
ら  
け

ノ  
御  
代

ア  
マ  
ム

ウ  
キ  
ハ  
ル

カ  
ラ  
ヒ  
ミ  
ハ



枕年人唐

山鳥や

毛トシ居や

計仕ど

山遊人

暑ひりや  
富士見  
直白よ  
ぞくろぐ



橋を走

奥よ

さくらん

のち

のりかみの

中納言家持

おも

うつゆきよ



ミノノカワ



豪瘦

乳

醉穀渡

あはらのたぶん



うほへ  
翁源



陽城院

像山齋  
柳文



像山齋  
柳文

うけく

渭

叟

と



象山齋  
柳文

光孝天皇

ササギの

英脣

去年の雪



今朝

組の物語



在ホ葉平

薦あさかく

うれしきやひよる

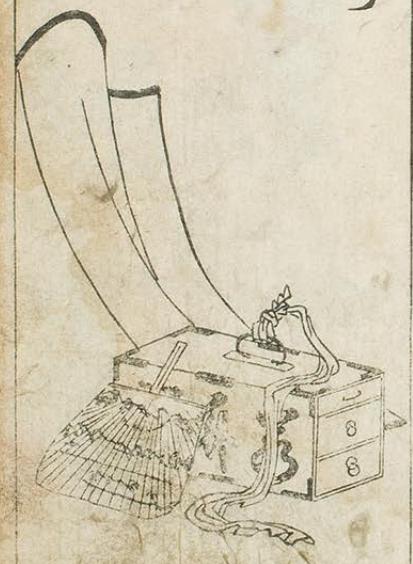
前原の御行

箱舟で

あと

濱

三谷舟



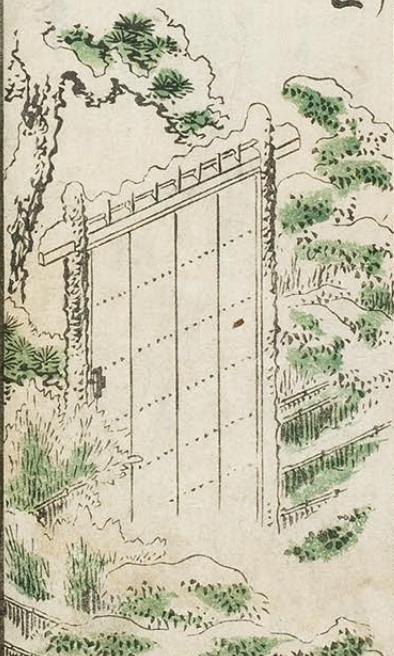
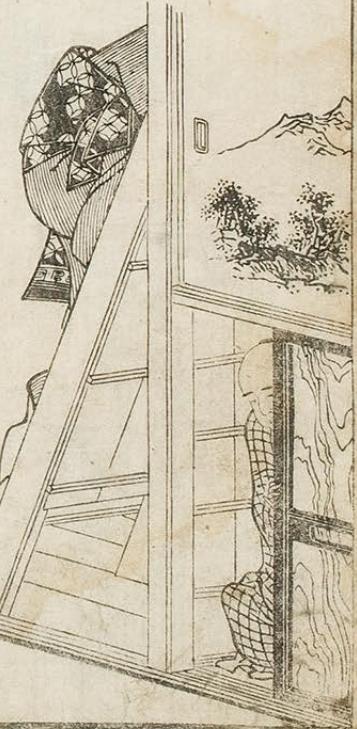
あひで  
候

候

候  
上三日

え良親王

おとほく  
てもあるもへ  
のうれ



主御内侍

今まこと

毛絨流々

初松魚

文屋康秀



初秋もべ  
居の秋元  
音の秋元



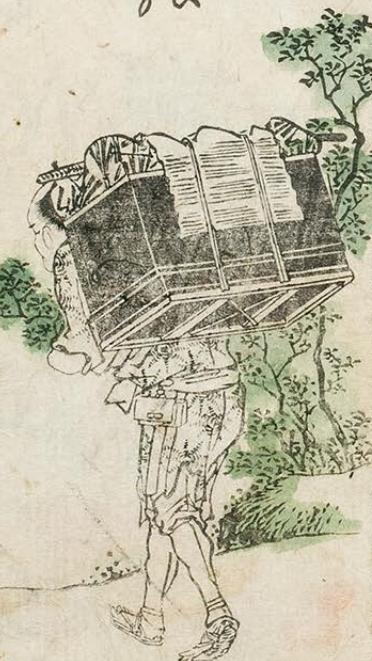
百人一首

貳

紅葉公  
身信  
古葛翁  
新葉子  
秋葉也



出番や  
丈極町強  
三季草店  
古葛翁



錦織もて  
古の秋や  
川代系



月人也  
徳子惟子  
肌毛



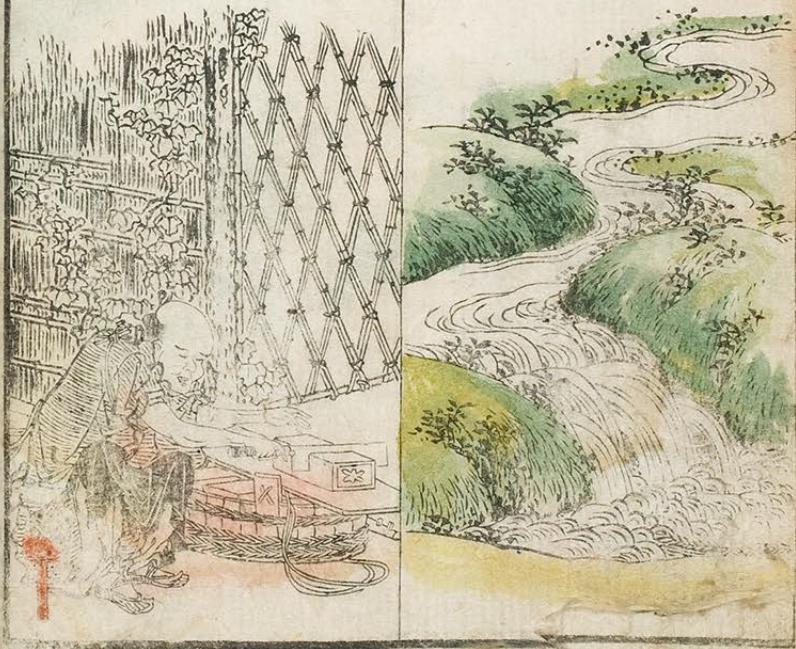
太江千里



行酒用行酒  
ありてお持  
ゆきと  
金生忌寄  
ありにけり  
詰つきをう



源宗テ朝臣



物工是則

初音也

さむえにれ毛

山あらわ山

春孟引樹

晴吟や

流れ

うえぬ  
涙擦

木



狂友則

醉碑の

狂歌

雲庵ハ

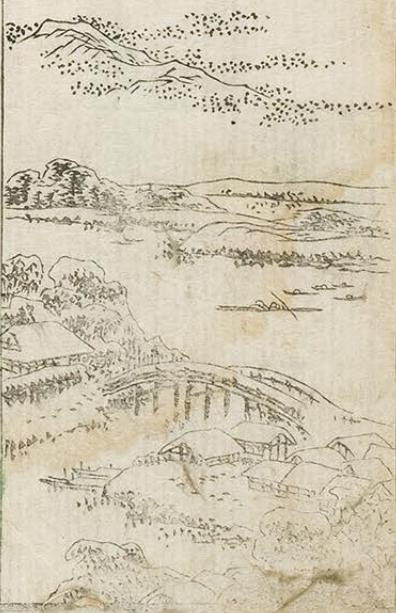
梅高

翁子の風

押次の

友の歌

物工藝



右近

文屋  
朝康

ひとの斧  
人の斧  
人情  
人情  
人情

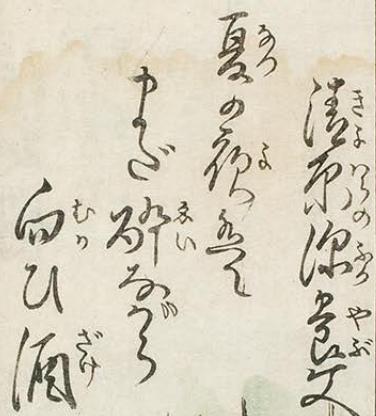


里芋  
里芋  
里芋  
里芋  
里芋



夏の物語  
夏の物語  
夏の物語  
夏の物語  
夏の物語

白ひ衣



浦元

松原元彌  
波ハ木  
大二日



士生忠見  
我達の深本

いと  
内裏

うす

平義盛  
ちゆる  
かや  
ぬのせ

かく人眼



船高  
多羅之子  
花の名



多羅等

捨ゆ御衣殿也

あひ  
毎日とて

さち  
後や師走の  
三公令也

中納言朝忠

名代の

きく  
黒い駕

時も



謙徳公

城主守純

のづか  
御駕け

おねがい

船底の櫂

佐々山元



あらわしの山

初章

至宿

心や  
こころよ

源重之

摺どりの岩

寺宿で

年々難



大中吉能宣羽呂

以相守

満士  
騰て

焚火のあ



萬葉義孝

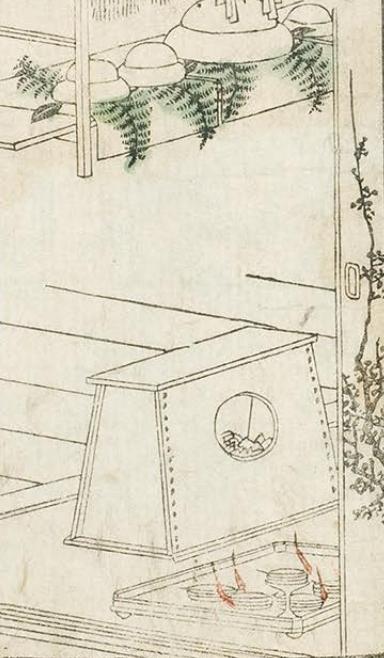
宝入念仙惣

うづり

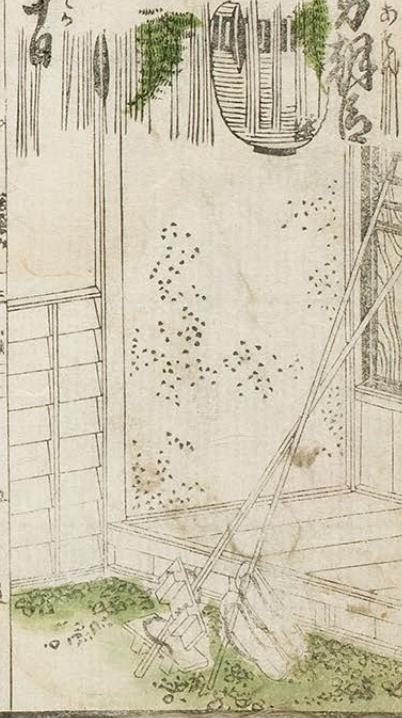
令まえ



佛同三司母



This image shows a page from a traditional Japanese manuscript. The page is filled with vertical columns of handwritten text in cursive Gothic script. In the lower half of the page, there is a detailed black-and-white woodblock-style illustration of a garden scene. The illustration depicts a large, circular pond in the foreground, surrounded by various trees and shrubs. A simple wooden railing or bridge structure is visible on the right side of the pond. The overall style is characteristic of Edo-period book illustrations.



太田道灌公任

温泉の山や

松魚も絶て

ひき  
ひき

和泉式部

思生よう

約半丸

さく死



太田三俊 捉書

橋名氏

生平物や



あらわし

やまくらべ

わかな時鳥

小或因侍

衣更衣

やま山里の

みどり

仕物入浦

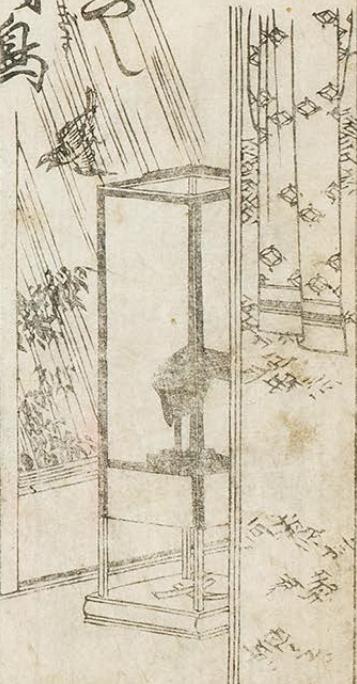
のひの  
桜先傳て

櫻の鳥

法師假言

夜をこきて

やまととく  
年の雪



大系事記

くちきり  
切り人

後漢書

備用禮文

拾芥錄卷之三

卷之三



相撲

卷之二

毛氏  
清江集

卷之三

大傳正統

後編  
卷之三

卷之三

山  
文



周防國侍

宿りやまと

豪華目

三重院

仙のもので

強引二日金



樹の下  
樹一鉢て毛

な  
波

勝國法師

方綱と徑信

わやうや

角田也  
繪葉玉法の領



絵子因和歌主家紀伊

鶴残魚釣の

まくわさけ

鷺浴衣

鶴千紙云医房

雲と又

小吸筒



こはげ

うらきみるみ  
ちとあざみ

御宿中納門

とれどこ  
金剛



あぢうらの  
高麗基後

あさる  
朝寝

いまとくば



酒 さけ  
酒 さけ  
酒 さけ  
酒 さけ



源兼同



侍賢の院海川

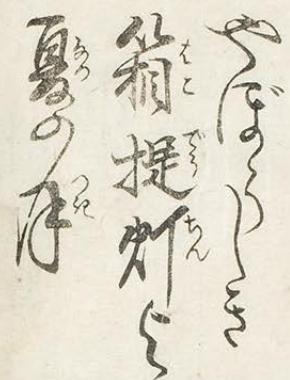
札丸義経

鶴

王様



後徳太子たる



左近侍師

轆九倍

ねも金八



皇后宮室後成

李昇

道こうと泥渭

梅抄元



柳風の雪も  
かわい

卷之三



かく  
あとの月夜

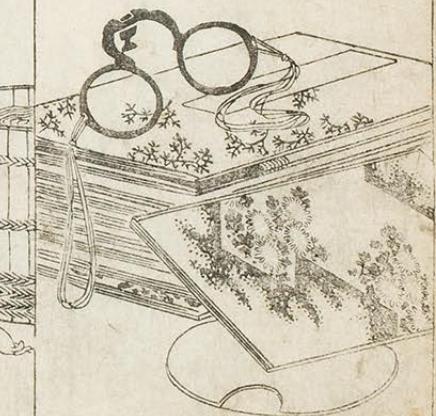
西行法師



音 かと 満 とあり くわう の 聲 の かわう



元  
久  
也  
大  
久  
也  
尚  
齒  
玄



金匱院別局

後達

タマリの園の

晏乳

殿富院大廈

うまごも

辻ヶ花

後宮極極

さむら

布ふく

いのく者

二重院禪故

人玉

白雲

時鳥





経二五

檀牛御定家



以移もる夜アモ  
三日也  
拂ひる角



人情

人情

あとの町  
宿毛の院

頬法院

あま淵

古見入萬

志村ふにえ

母

右 白猿獨吟 小倅百句集

弓を解のしとくにさか  
櫻もつづて他の加奈の歌  
うと鶯

春の部

切磋琢磨

歳旦

ゆく玉のまは幸いあり杜者宅を  
今日おまきの人のほしは草履を  
喰や少く一匙の酒をあくべ  
年取は西移候中入生齒う  
（先祖の養まで我をよ布ふ所すと  
安附のすりてあやかう）

落多ひ





生某と人ま一 指や とあ ま  
かト下戸や 花はるーのこは  
花の要生か一 指 まと谷を  
まのくわき家うりすら押葉立の  
也草木をたまうる  
か あ なき 飴物歸や そのの家

夏は朝

続摩奈

さあまとふまきほじや 鳩サ敷

甲冑かす海の能席かとの  
すを出されま

粉圓射ル

金銀花  
蜘蛛

みづくとてやまのうの豆子す  
ソレ難やうらひとつてあつまひり  
揚由も食傷あり、粉 あんぶ  
かんま子を子のて吹のきみたまよ  
立又ノは安れまのうり 重浪む  
株あがる。御きもか一 あそぐと

醴

松臭

こひうは候ゆのあせかうと ね

釋迦

も持すすや 松臭とやくま

えらき本の行と一本にさげて日本語

日拿

引しきテハ十二斤のうけ残う  
古背うらをちあけたまくひど  
ら持はれと まへと まへ 青日拿

あまく改のシヤニヒミ

泉水

はおいや故ゆるゆく我らまは  
泉がゆや 孫とひよと子のちほり  
もひゆゆきがゆの晴あらま  
三六の裏の裏のまくらとくとく今

まもるのむすめ  
と年暮はせぬ身のうゑうを度むらき白雲  
日下の景のゆゑくらうとせうきがく風  
漱ふもとくかきえり　墨竹下　と  
落葉をかづいて杜母の下へどるあくやうの秋の聲  
一論へおこまるもとく杜母の邦  
さうじわど酒け呑みぬる人

秋水部

残暑  
七夕  
高灯籠  
文珠會  
各自 ふかへも ものの 所を うめ  
と骨とと 早と一丁 まばー 姫  
印と 痞と 文仲と や みと  
文珠会や 先ツ 柳子の 庭子 蔭主之人

此踊り七里余方ノ足也

卷之二

童角力

稻妻

扇置

街突ソや江戸から東北大雪んを  
費賄とちあくとま達源とひ  
野角力や幕はや和川のせき山  
日月へ天地の眼セイ  
稻荷山やこれハ月日の目だら  
靈社の若狭や御年とそそ  
鶴吹了もまたはりかどもちやんや  
後はうちよ扇を外トよ秋のうそ  
五月の糸幣等小豆の枝らねく者もお  
ゆき風や吹ふけむるやう

摹

卷八  
之

厂の上野田町に在りて、  
株式会社やとくもあむぢらーとくも

蓮の露

便急通のち

李でんと見よ

秋の

のま

清光

后月

影口傳  
鱸はり  
幼紋

田守

樹  
重陽

名角やあくら音トキモ  
芳町のらすのほ／＼ちよりの  
名角や大猿長者大ひびき  
十五夜の五吐みありが十三夜  
十三夜床着ニテリシカ月夜火  
草靴甲ニシカかをば、ざんむく都  
すき湯ノ宿ナチリはおにぎり  
ちり／＼やナ本長野は桜の下  
麦かうら立合ノミ田ノリ季

秋風起白猿がけ艸木黃落柿えんむ實房  
ち坂村もほき舎はまく甘いのを  
葉の酒重陽ナヒトナリ

梨子  
田家  
西湖寒  
新修

駄車追善

冬秋部

夷譜

十月坐き玄少て休きはす候少す先を休在候りま  
大や／＼源朴草／＼そちは是  
為免もく隣ニテホモ掛塗の玄少  
國の火をさうるの及あす財物の量を減らす事  
うらえ火や團／＼幸分清ノ事  
結ウタマヤ二年豊年ノ貞元

仁たまトは彰見世にさるふち  
らきくう家家のせ絶や憔悴  
このゆうには常と改め一付

茶の巻  
冬牡丹  
ふる  
夏る春  
西施乳

雪達廣  
葱

ち川雪や襄候様々とフジも  
葉のもひや衰休の間かハシトモ  
色のほかひじてんそくやを経て  
演じとくさんじゆきり唄うるむ  
おとこむねうかす男は矣男うるむ  
袖縫はえのへらひとらぬのふぐふ  
或日物をりて歌を参考不意ちせきとけり  
幻のんや階梯ひらかくさくくとさ  
ゆきぎり處何不首南小糸つ白一  
湯きとしり湯虎よ似そりあ仙奇

紗豆  
除夜  
宝船

紗豆や女房そつり輕雪豆  
豆芋さきや鬼もとまへは弱ひわ  
多、つて私面根もとてこそ福禄毒

○

年はねむかねがまかこに、うかふういはるす小都人

成のまきのゆうりて赤枝子酒味燐出初や、おとづれを居体月やう付小付  
長持するゆ中、ぬれ萬石と日本千秋と説いてあるのひをあそびりるすはる  
牛川伸也おもとせぐて小舟宿一りとよべくら。

和田右馬の八十船がくも漕出人と人あひ掌せあひの治承

ある所アヘヌのやくさぶがみの牛ようきを画ぢみ相あせても先上り  
をそ人もれどをみふからくのゆあづきがなまや大衣付

着き女の要どきゆそく拂ひもとづきだ扇てはづくまのひざまと  
おもての君のあつての扱ふ栗あめもむきそぞる人をま

年の竹へよろぼやけ一そりて扇横と、二そりとて其の  
せーの上のもの板すふくの葉すへじことやいとんちじゆを

あやまつ向きとてのゆの一付材とち  
成上りのゆのやくさぶがみの牛ようきを出合詞一そりとて其の  
あやまつ向きとてのゆの一付材とち

香爐

（方角）一ノ山里の李家所作也

（方角）一ノ山里

東夷南壁に於せり人よ事と歌玉翁今人よりは  
弓自由子本年の正月の後日耳目もよきと爲す  
とはのうれしもの萬年はりて平定通事の儀長久がんとぞ相  
卑いへやこそうほをなうさくみゆめ引在の中下をどもひべト公室  
教団の陋巷ニ付とほうとは御の者く以外のく井手まのくはれ給ふ  
万年の吉日へ移すあまくおやぐまらゑびそそう家のものや、てま  
うるのゆきのあらかじめぢやうやうすすむと酒芋て  
世を扶く友達かくやうかきり白雪夜不山やくが故  
獨居の徳

すそ川りや毎やふくとせよとてよみぬよる

やほよこ（スル）  
千鶴万歳

享和三癸亥歲孟春新鐫目錄

は生（草在）歌集

反古菴白樓

於多（はにね）狂奇集

同

鉢（作句）撰

同

東月（迫句）集

同

右追（出板は良也求て）

畫工

北齋辰政

彫刻

本石町二丁目

西村原

六助

南芽塲町

今福屋

